第61回医療薬学公開シンポジウム開催報告書

実行委員長　　本間　真人
（筑波大学附属病院薬剤部）

平成28年7月31日（日）につくば国際会議場（茨城県つくば市）において、第61回医療薬学公開シンポジウム（主催：日本医療薬学会、共催：筑波大学附属病院総合がん診療センター、後援：一般社団法人茨城県病院薬剤師会、公益社団法人茨城県薬剤師会、茨城県がん診療連携協議会）を開催した。

本シンポジウムでは、テーマを「薬剤師に求められる副作用対策～がん薬物療法を中心に～」に設定し、薬学部教員、病院薬剤師、薬局薬剤師および医師の立場から各分野で活躍されている4名の先生に副作用対策の観点からご講演いただいた。参加者は144名（病院薬剤師113名、薬局薬剤師23名、大学教員4名、その他4名）であり、北海道、山梨、静岡など茨城県外からの参加もあった。

シンポジウムでは、初めに大阪薬科大学薬学部臨床実践薬学の恩田光子先生から「高齢者における潜在的不適切処方と副作用の発現」についてお話しいただき、潜在的不適切処方と副作用発現の関連などから地域医療における薬剤師の役割や職種間連携、特に医師との情報共有の重要性について説明していただいた。次に、病院薬剤師の立場から東京女子医科大学病院薬剤部の深谷寛先生に「病院薬剤師が実践するレジメン評価とがん化学療法の副作用対策」についてお話しいただき、レジメン審査から患者適応までの安全管理や外来患者に対するがん化学療法の副作用対策の取り組みについて事例を紹介していただいた。薬局薬剤師の立場からフレンド調剤自治医大東店の本田泰斗先生に「薬薬連携による外来化学療法の副作用対策」についてお話しいただき、近隣薬局で共通に用いる副作用チェックシートや薬局で得られたモニタリング情報を病院側へフィードバックする取り組みについて紹介していただいた。

特別講演では、筑波大学医学医療系臨床腫瘍学の関根郁夫先生に「がん薬物療法における副作用の対策－薬剤師に期待すること」についてお話しいただき、がん薬物療法を大きく殺細胞性抗がん薬、分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬の3つに分類してそれぞれの副作用の特性を解説していただいた。また、医師の立場から、薬物動態を考慮した治療計画、作用機序と危険因子に基づく患者選択、患者・医療従事者教育などにかかわる専門性の高い薬剤師の必要性についてお話しいただいた。シンポジウムと特別講演を通して、病院薬剤師および薬局薬剤師に求められる副作用対策について考える良い機会になったように思う。

最後に、今回のシンポジウム開催にあたりご共催いただいた筑波大学附属病院総合がん診療センター、ご後援いただいた茨城県病院薬剤師会、茨城県薬剤師会、茨城県がん診療連携協議会、さらに企画・運営をご助言いただいた日本医療薬学会事務局の方々に厚く御礼申し上げます。